

連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第六回　自然祭祀

南出喜久治（令和6年11月15日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やほよろづへの　くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

【自然祭祀】

祭祀とは、祖先祭祀、自然祭祀、英靈祭祀が一体となつたものですが、このうち、自然祭祀について述べます。

災害の頻度が高く被害が甚大である災害国である我が国では、自然といふものは、恵みを齎してくれると同時に、地震、津波、火山噴火、風水害、旱魃などの様々な災害を齎す自然に対しての脅威・恐怖を覚えます。自然災害だけでなく、それに起因した人災も起ります。それなのに、どうして自然に対して感謝だけをするのかといふ素朴な疑問が起こるのは当然理解できます。

しかし、自然災害といふのは、何かを暗示してゐるのです。そのことをよく理解しなければ自然祭祀が理解できないのです。

災害があれば、被災地は大きな被害を受けます。生命と健康を損ね、生活全般に甚大な被害を被ります。ライフラインが切断され、物流が遮断します。近隣地からの救済援助はどうしても必要になります。もし、被災地と近隣地を含む広範な地域が一体の生活圏として生活物資を依存し合つてゐる場合は、その全体が共倒れになります。

ですから、後述するところ、地産地消、完全自給を達成できる小規模単位な「単位共同社会（まほらまと）」を全国津津浦浦にモザイク状に張り巡らせる自立再生社会にしなければなりません。自然災害は、そのやうな生活をする必要があることを教示してゐるのです。これが実現できれば、災害地の復興は被災を免れた近隣からの援助で迅速に進んで被害を最小限度にすることができます。

このことを自然災害によつて教示されてゐることの有難さに感謝することが必要なのです。「備へあれば憂ひなし」の真の意味はのことなのです。

備蓄をするだけではなく、社会全体が危険分散するための構造によつて災害に備へることなのです。

ところが、現代の社会は、その認識ができずに、自然に対して、恵みには感謝を捧げ、災害には怨嗟を抱くのは、自然への感謝が理解できてゐないことなのです。

いまでは、その方向に逆らつて、真逆の方向に進んでゐます。災害に備へることを忘れ、利便性のみを追及して欲望の赴くまま拡大して災害に弱い社会へと突き進み、自由貿易によつて国家全体の自給率を下げ、ワンワールドの危険な方向に向かつてゐる増長した人類社会は、災害の被害が年々甚大となつてゐます。まさに天に唾をするが如き邪道が行はれてゐるためなのです。

つまり、自然祭祀は、自然の教示を受け入れて社会変革を実現するためのものであり、祖先祭祀と英靈祭祀と不可分一体のものとして実践することが求められてゐるのです。